

# アユ放流種苗の系統による 釣獲性および滞留性の差異の検討

福島県内水面水産試験場 調査部

部門名 水産業－内水面(増養殖)－アユ  
担当者 鷹崎和義

## I 新技術の解説

### 1 要旨

東日本大震災により(公財)福島県栽培漁業協会が福島県内ダム湖産系種苗を生産できなくなって以降、福島県の内水面漁業協同組合の中には、県外のダム湖産系種苗の放流量を増やす例がみられているが、当該種苗の釣獲性および滞留性については釣り人への聞き取り等による主観的な評価しか行われていない。そこで、三浦ら(2012)を参考に、福島県内の3河川(会津、中通り、浜通り各1河川)にダム湖産系と海産系の種苗を放流し、友釣と投網で再捕して釣獲性および滞留性の系統による差異を客観的に評価した。今回の調査からは、釣獲性および滞留性の系統による差異は確認されず、再捕尾数の河川や定点による差異が窺える等の知見が得られた。

- (1) 2018年6～7月に、野尻川、小田川および木戸川に流程約2kmの試験区(上下に物理的障壁があり、遡上・降下の影響が極力少ない区間)を設置し、区内の4定点でアユ人工種苗を合計約400kg(ダム湖産系、海産系各約200kg:ダム湖産系の脂鰭を切除)放流した。2018年7～8月に、各河川の試験区の4定点(上流から順にSt.1、2、3、4)で3回ずつ、友釣と投網で放流種苗を再捕した。再捕されたアユの個体数と全長を測定した。
- (2) 再捕尾数は野尻川水系250尾、小田川622尾、木戸川83尾、合計955尾であり、河川による差異が窺えた。いずれの調査、漁法でも、ダム湖産系と海産系の再捕尾数はほぼ同数の場合が多く、系統による釣獲性および滞留性の差はみられなかった(図1)。
- (3) 友釣による再捕尾数を系統別、定点別に整理した(図2)。野尻川では、St.1、2のみでアユが再捕された。小田川では、いずれの調査でもSt.1での再捕尾数が最も多かった。木戸川では、St.1またはSt.2で多く再捕されることが多かった。これらの結果から、アユは両系統ともに上流へ多く移動したことが推測された。
- (4) 再捕魚の全長は、友釣の方が投網よりも大きい場合が多く、同一系統内では大型魚ほど縄張りを形成しやすい傾向がみられた(図3)。

### 2 期待される効果

アユの釣獲性、滞留性等の評価に必要な基礎資料となる。

### 3 適用範囲

水産研究者、(公財)福島県栽培漁業協会、漁業協同組合、遊漁者

### 4 普及上の留意点

- ・河川による再捕状況の差異の原因を検討する必要がある。
- ・本調査期間中は、例年よりも高温で水量が少なかった。このことが調査結果に関与した可能性を考慮する必要がある。

## II 具体的データ等

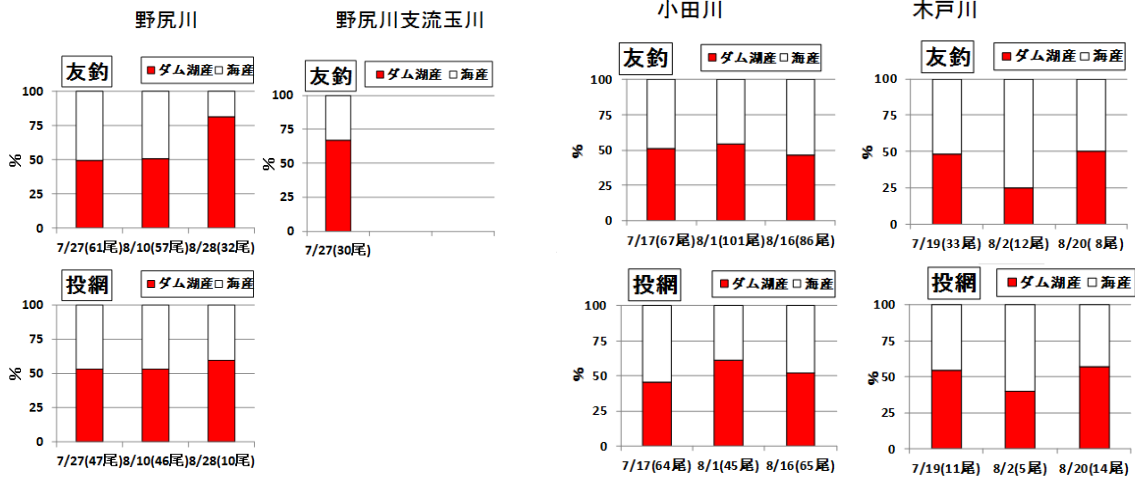


図1 アユの系統別再捕割合の推移(河川別、漁法別)

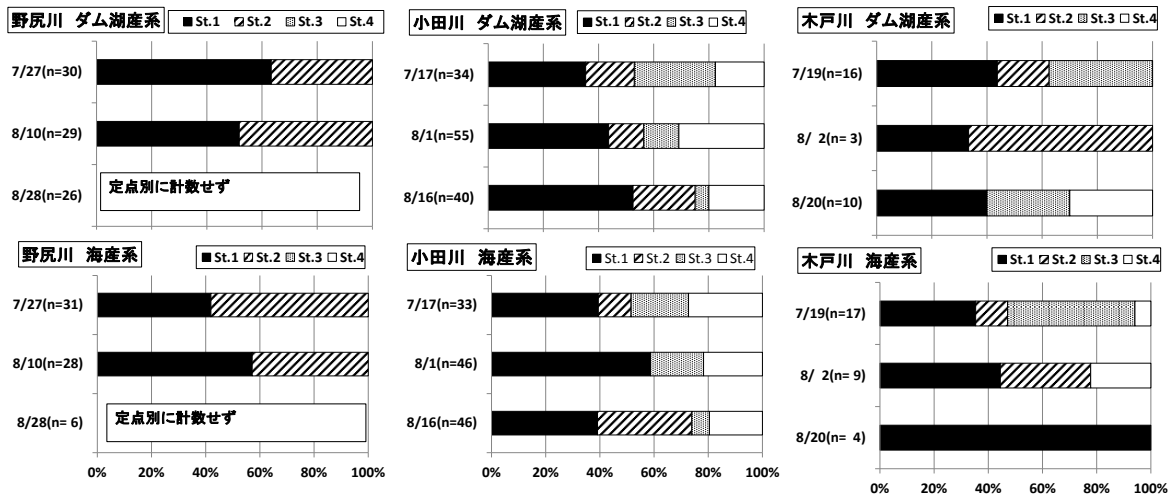


図2 アユ(友釣)の定点別再捕割合の推移(河川別、系統別)

## III その他

### 1 執筆者

鷹崎和義

### 2 成果を得た課題名

- (1) 研究期間 平成30～32年度
- (2) 研究課題名 内水面漁業の復活に向けた  
種苗生産・供給技術に関する研究

### 3 主な参考文献・資料

- (1) 三浦ら(2012)人工アユ種苗の遊漁資源としての特性評価: 同一環境で継代飼育された2系統間の比較 日本水産学会誌 78(6) 1149-1158

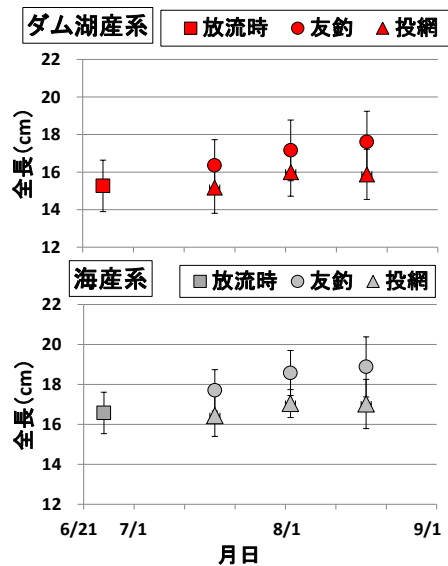


図3 小田川で再捕されたアユの平均全長および標準偏差の推移(系統別、漁法別)